錦織南遺跡 II

1994.3

錦織南遺跡調査会

はじめに

錦織南遺跡は、富田林市の南端に位置する集落遺跡です。これまでの発掘調査では、縄文時代から中世に至る遺構が検出されています。

このたびの調査は、大和川下流流域錦郡中継ポンプ場築造に伴う事前調査として実施したもので、縄文時代晩期の河道などが検出されました。そして、平成３年度に実施した調査成果とあわせて、調査地周辺の低位段丘上に縄文時代後期から晩期にかけての集落が存在した可能性を示唆する成果を上げました。

最後になりましたが、発掘調査にご協力賜りました方々に厚くお礼申し上げます。

錦織南遺跡調査会
理事長　**清　水　冨　夫**

目　　次

はじめに

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　調査の成果……2

1．第１調査区……3
2．第２調査区……4

Ⅲ　出土遺物……8

1．第１調査区……8
2．第２調査区……10

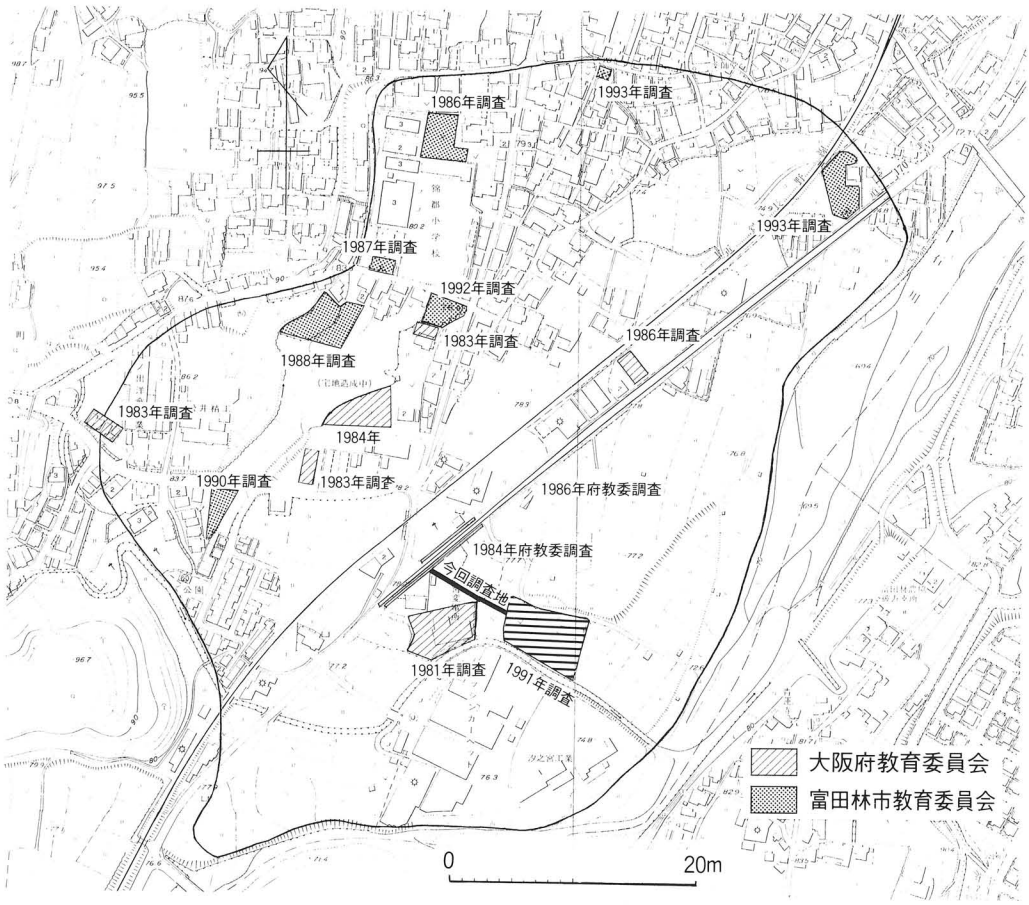
Ⅳ　まとめ……13

縄文時代晩期の深鉢

Ⅰ　調査に至る経過

富田林市は、大阪府の南東部に位置する。市域のほぼ中央には一級河川である石川が流れている。この石川の両岸には低位及び中位段丘面が発達しており、特に左岸については良好な平坦面を有している。この左岸の石川に近い安定した地形には、東高野街道が延びており、この周辺には現在の集落が密集している。こうした恵まれた立地条件をもつ平坦面に縄文時代から近世に至る集落遺跡が存在する。

錦織南遺跡は、石川左岸に立地する遺跡のなかでも南端にあって、東は石川に接する段丘縁辺まで、西は錦郡小学校のある低位段丘の西縁までの東西470m、南はほぼ調査地付近として北に630mの範囲に広がっている。遺跡の内容については、富田林市教育委員会や大阪府教育委員会の発掘調査でしだいに明らかになり、縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡である。調査地の南に位置する汐の宮変電所の事前調査では、縄文時代晩期の河道が検出されている。



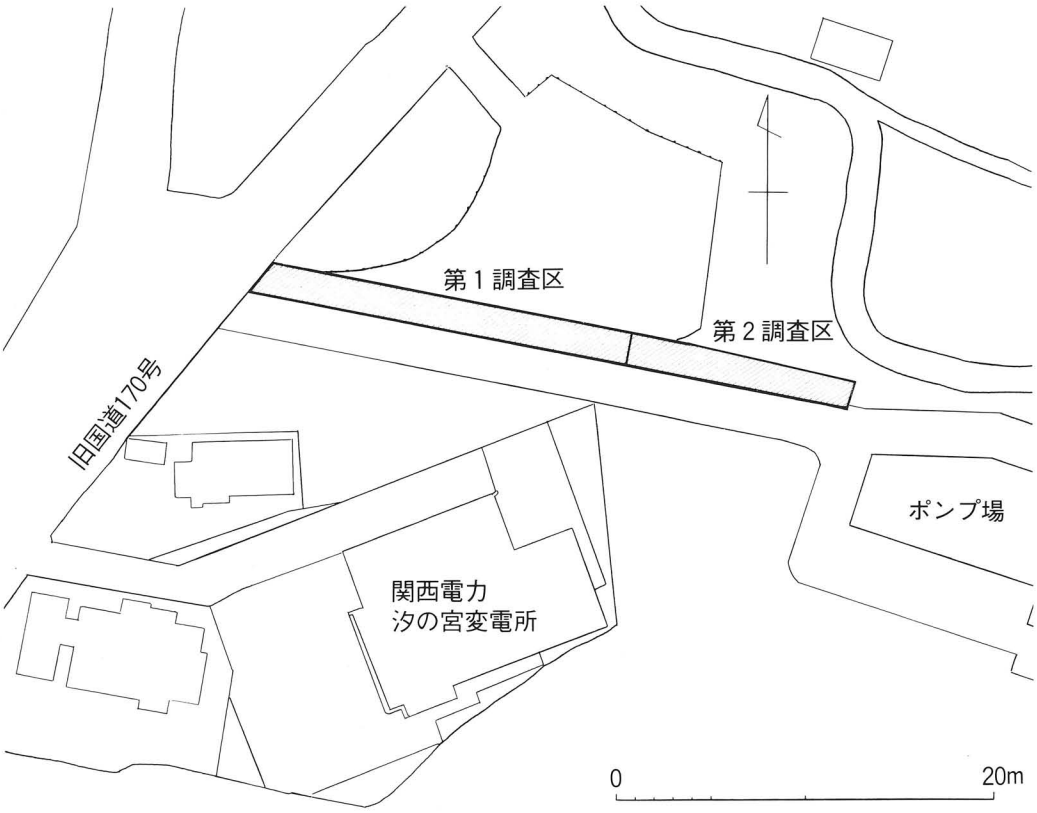
挿図１　発掘調査地位置図

今回の発掘調査は、大和川下流流域錦郡中継ポンプ場築造に伴う調査で、錦織南遺跡調査会が大阪府南部流域下水道事務所からの委託を受けて実施したものである。調査は、平成６年度の供用開始に向けて、第１次調査としてポンプ場建物建設予定地について平成３年度に1,774㎡を全面発掘調査し、残りのポンプ場進入路内の管渠埋設部分については、平成４年度と平成５年度の２次にわたって調査を実施した。

平成４年度の第２次調査については西半の218㎡を平成５年１月１１日から３月２９日まで、平成５年度の第３次調査については東半の180㎡を平成５年８月２３日から１０月２０日にかけて現地調査を実施した。また、整理業務については第２・３次調査とも平成５年８月２日から平成６年３月３１日まで実施した。

Ⅱ　調査の成果

調査は、ポンプ場進入路内の管渠埋設部分を調査対象とし、平成４年度を第１調査区、平成５年度を第２調査区として、２工区に分けて実施した。



挿図２　調査区位置図

1．第１調査区

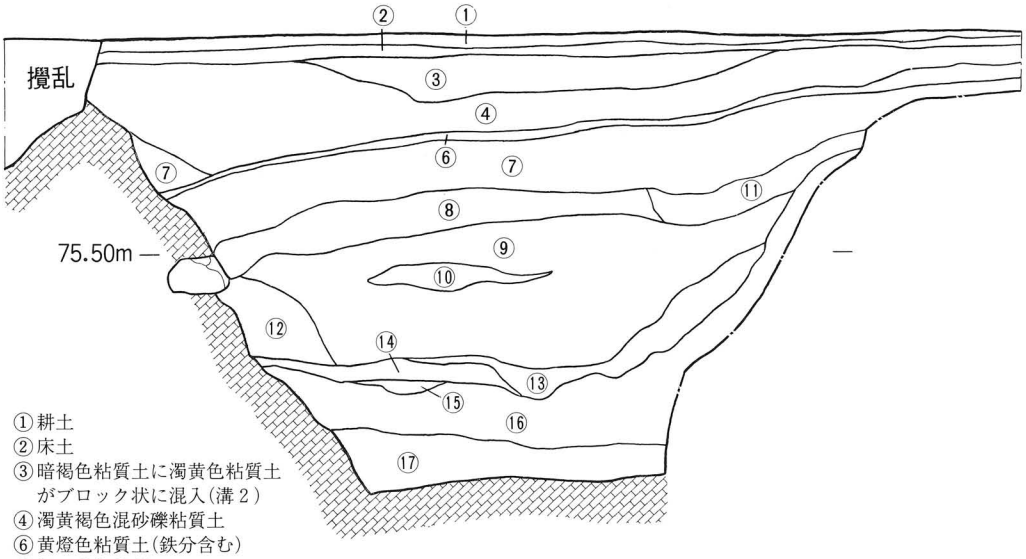
調査は今西淳を担当者とし、平成５年１月１１日から３月２９日にかけて現地調査を実施した。調査対象面積は218m²である。

基本的な層序は上から順に、厚さ1.5mの盛土・耕土・床土・褐灰色土である。このうち、褐灰色土については調査区の西方から約９m地点より以東に認められ、厚さは約10cmある。また、旧国道170号線の歩道路肩から東方約41m付近から段丘崖の急な傾斜があって、さらに黄灰色弱粘質土が混じる灰色土・褐灰色粘質土が混じる灰褐色粘質土・褐灰色粘質土・褐灰色混礫土・黄灰色粘土・灰青色混礫粗砂・黄褐色粘質土などが堆積している。これらの層からは土師器・須恵器・瓦質土器・瓦・陶器が出土しており、近世の時期に水田拡張のため、整地の際に埋められたと考えられる。

検出した遺構には溝４、ピット６、土壙６がある。

溝　1

調査区の西端に位置する。溝２の下層にあって、東肩のみ検出した。西に接する国道と



①耕土
②床土
③暗褐色粘質土に濁黄色粘質土がブロック状に混入（溝２）
④濁黄褐色混砂礫粘質土
⑥黄燈色粘質土（鉄分含む）
⑦濁灰黄色粘質土
⑧黒灰青色粘質土
⑨黒灰色シルト質粘質土（植物遺体多量に含む）
⑩青灰色細砂
⑪黒灰色混礫粘質土
⑫黒灰青色シルト質粘質土
⑬青灰色砂質土（シルト）に黒灰色シルト質粘質土がブロック状に混入
⑭青灰黄色砂
⑮青灰黄色細砂
⑯褐色シルト質粘質土
⑰青灰色シルトに褐色シルト質粘質土がブロック状に混入

挿図３　溝１・２南壁断面図

平行に延びるようである。南断面での深さは2.3mを測る。幅については、国道東端の事前調査では遺構が検出されていないことから、ほぼ6mに近いと思われる。時期を決める遺物は出土していないが、下層には植物遺体を多く含む。最下層における^{14}C年代測定の結果では、弥生時代後期のデーターが出ている。堆積土については挿図2の断面図による。

溝　2

溝1の堆積土を掘り込んで、2～3mの幅で溝1と平行に走る。埋土は濁黄色粘質土がブロック状に混入する暗褐色粘質土で、古墳時代から奈良時代にかけての土師器、須恵器が出土している。深さは25cmを測る。北西部にはピット状、土壙状の落ちがある。

溝　3

溝2の東に位置し、溝2と同方向に延びる。もっとも幅の広いところで2.5mある。埋土は濁灰色土で、深さは16cmを測る。遺物は出土していない。

溝　4

調査区の東端部にあって、すぐ西側では東に約20cmの段差がある。この南北方向の段差と平行に延びる。もっとも幅の広いところで1.7mある。深さは6cmと非常に浅い。埋土は褐灰色土で、遺物は出土していない。

ピット

調査区のほぼ中央付近で検出した。すべて平面形は楕円を呈している。短径18～37cm、長径27～46cm、深さ4～12cmの規模をもつ。埋土はピット1・2・5・6については、青灰色粘質土、ピット3・4については茶褐色土がブロック状に混じる褐灰色粘質土である。いずれも遺物は出土していない。

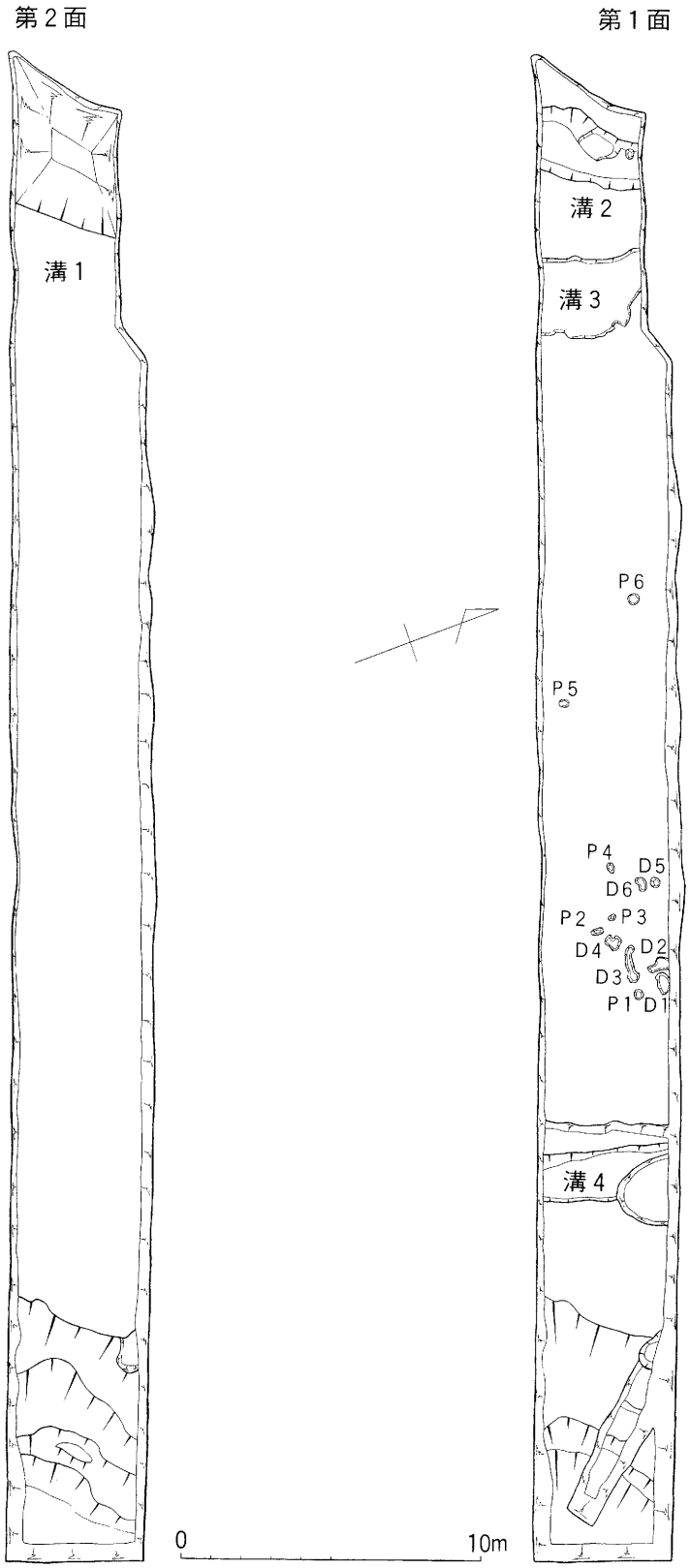
土　壙

調査区中央よりやや東側の北、ピットが集中する付近で検出した。平面形はいずれも不整形で、深さも2～13cmと浅い。土壙1・2については一部分しか検出していないため、正確な規模等は不明である。埋土は土壙1・4・5・6については茶褐色土がブロック状に混じる褐灰色粘質土で、土壙2・3については青灰色粘質土である。遺物は土壙1から羽釜が、土壙6からは土師器が出土している。

2．第2調査区

調査は中辻亘を担当者とし、平成5年8月23日から10月20日にかけて現地調査を実施した。調査対象面積は180m^{2}である。

基本的な層序は上から順に、盛土・耕土・床土・灰青色土・黄褐色粘質土・褐灰黄色土で



挿図４　第１調査区平面図

ある。このうち、灰青色土は第１調査区の段丘崖面に堆積する第７層に、黄褐色粘質土は第８層に対応する。褐灰黄色土は第２調査区の平坦面のみに認められ、第９層になる。それぞれの厚さは15cm（第７層）、10cm（第８層）、８cm（第９層）である。また、段丘斜面の第７層上には約５cmの厚さで黄灰色粘土（第６層）、約60cmの厚さで20cm大の円礫が混じる褐灰色土（第５層）が順に堆積する。これらの堆積層からは弥生時代から近世の遺物が出土している。第１調査区の段丘上面との落差は約２ｍある。

検出した遺構には第９層上面から掘り込まれた石詰及び石組の暗渠５条、２本の時期を異にする自然河道がある。

暗　渠

いずれも第８層を除去後、調査区中央の第９層上面で検出した。ほぼ東西方向のものが４条、北西から南東方向のものが１条ある。このうち、２条は鳥居状の石組をもつもので、蓋石には30cmぐらいの偏平な河原石が使用され、両側の支えには同サイズの石を縦長に置き、中に10～15cmの河原石を詰めてあった。他の３条は２～20cmの河原石を詰めた構造になっている。

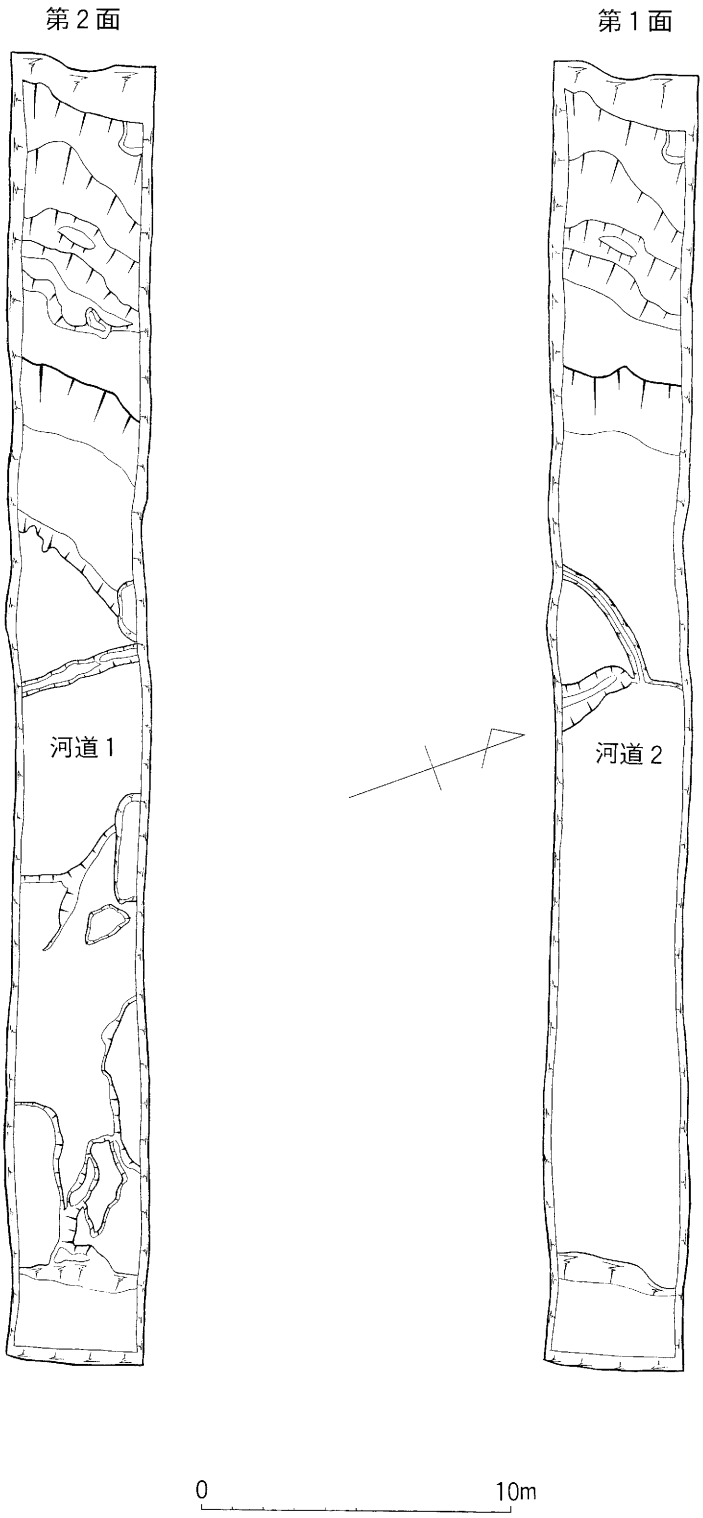
河道１

段丘斜面に沿って南西方向から東に蛇行する河道である。調査区西端の河岸段丘斜面裾には幅5.5m、深さ60cmの流路がある。底面は粘土層と砂層の互層から成る大阪層群で、流れによって地層の弱い砂層がえぐられた箇所が、調査区中央の溝状の落ち込みや段差、調査区東端のえぐりなどに見られる。調査区東半部の最も深い部分には20～50cmの円礫が混じる褐灰青色粗砂が堆積しており、東端では約１ｍの厚さがある。この層から縄文時代晩期の滋賀里Ⅱ式の深鉢が出土している。この上部にはシルトや植物遺体を含む褐灰色土が混じる青灰色粘土が堆積し、調査区中央部の南断面は約30cmの厚さである。この層からは砂岩製のたたき石、サヌカイト剥片・原石が出土している。

河道２

河道１がその機能を失った後、流れを同方向に有する河道である。西肩は河道１より約１ｍ西に段丘斜面を上がる。西端での深さは約１ｍある。調査区中央部では15cmの段差があって、ゆるやかに東に傾斜している。上層には灰色細砂が混じる暗褐色弱粘質土が堆積し、植物遺体を含んでいる。下層には細砂が混じる黒褐色弱粘質土及び黒灰色粘質土が堆積し、東端部での厚さは全体で約60cmを測り、最も深いところには黒褐色粘質土が薄く堆積している。これらの堆積状況から、流れは緩やかなものであったと推測される。遺物には縄文時代晩期と古墳時代の土器が出土している。

（中辻　亘）



挿図５　第２調査区平面図

Ⅲ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物には土師器、須恵器、黒色土器、須恵質土器、瓦質土器、陶器、磁器、砂岩製の石器がある。

以下、第１調査区、第２調査区の調査区別に、遺構毎に遺物を概観する。なお、図化した土器については観察表にして記述する。

１．第１調査区

溝２、土壙１、土壙６、包含層から遺物が出土している。

溝　２（挿図６－１～４）

古墳時代から奈良時代にかけての土師器、須恵器が出土している。

土師器は甕、皿、把手片が出土している。皿は平底で高台は付かない。内面はなで調整、外面はへら削り調整が施されている。なお、外底面には籾痕らしきものが認められる。

須恵器は杯身(４)が１点出土している。たちあがりから口縁部にかけて、切りとられたように欠失している。

土壙１

羽釜が１点出土している。生駒西麓産の胎土をもつ羽釜で、無段の口縁部とほぼ水平にのびる鍔部をもつ。

土壙６

土師器が出土しいているが、細片のため器種は不明である。

包含層

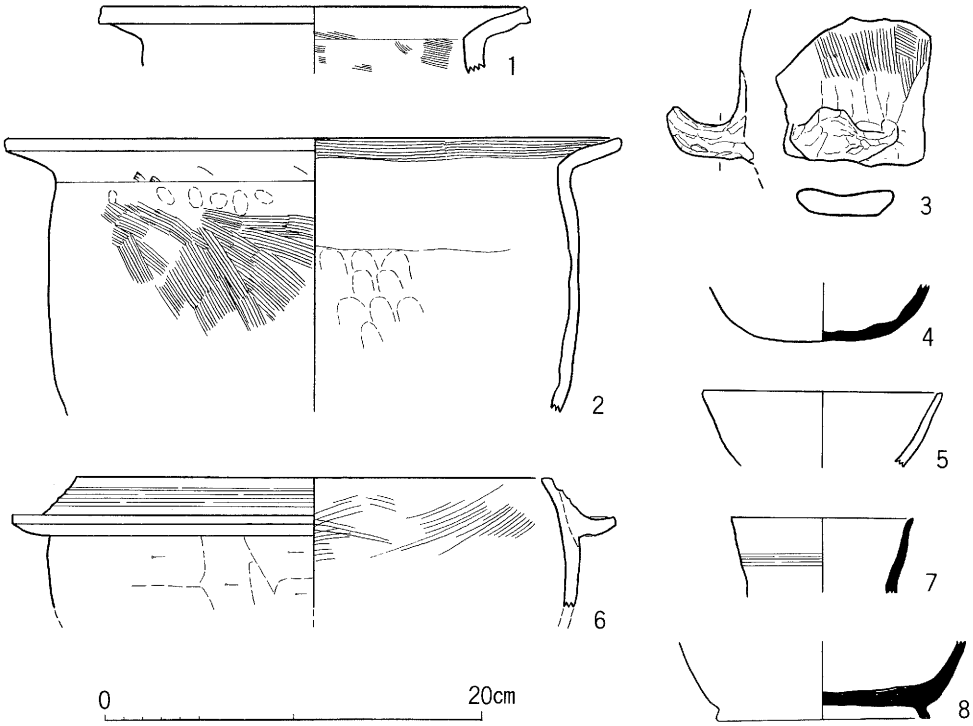
第５層

古墳時代から中世にかけての土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、近世の磁器が出土している。

土師器には小皿がある。

須恵器には甕、蓋杯がある。甕は古墳時代のもので、口縁部が丸くおさまる形態をもつ。蓋杯は奈良時代のもので高台をもつ杯身と偏平な天井部に拡張した口縁部をもつ蓋がある。

瓦は焼きの甘い軟質の丸瓦である。内面は布目が明瞭に残る。



挿図６　第１調査区出土土器

第４層

陶器が出土している。

第３層（挿図６－５・６）

土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦とサヌカイトの剥片が出土している。

土師器には古墳時代から中世にかけての皿、高杯、羽釜、練鉢がある。羽釜は生駒西麓産の胎土をもつ無段の口縁部と水平にのびる鍔部をもつものであるが、口縁部はかなり短くなってきている。高杯はへらで面取りした脚部をもつ。

須恵器は甕の頚部から肩部にかけての破片があるが器壁はかなり厚い。

瓦質土器には有段の口縁部をもつ羽釜(６)がある。

磁器には青磁の椀(５)がある。

サヌカイトの剥片は１点ある。原面打面をもつ縦長剥片で、垂直割れをおこしている。

第２層

土師器、須恵器、瓦器、須恵質土器、磁器が出土している。

須恵質土器が練鉢であることが分かるだけで、他は細片のため器種は分からない。

第１層

土師器、陶器、磁器、瓦、焼土塊が出土している。

以上の他に、撹乱を受けた地区および表採資料に砂岩製のたたき石(挿図８－３)、古墳時代と奈良時代の須恵器(７・８)、中世の須恵質土器がある。

２．第２調査区

河道１・２、暗渠１から５、包含層から遺物が出土している。

河道１（挿図７－９・挿図８－２）

縄文時代晩期、滋賀里Ⅱ式の深鉢(９)と砂岩製のたたき石、サヌカイト剥片１点、原石(２)が１点出土している。サヌカイト剥片は先端部片である。

河道２（挿図７－１０～１８）

遺物は上層と下層に分層して取り上げた。

下層からは縄文時代晩期、滋賀里Ⅲ 式らしき破片、長原式の深鉢（１０）が出土している。他に古墳時代の須恵器の蓋杯（１１～１３）が出土している。

上層からは古墳時代の土師器と須恵器が出土している。

土師器には杯（１６・１７)と壷（１８）がある。

須恵器には蓋杯（１４）と直口壷（１５）がある。

暗渠１（挿図８－１）

土師器、須恵器、瓦器、サヌカイト剥片が出土している。サヌカイト剥片（１）は両極技法で取られたものである。

暗渠２

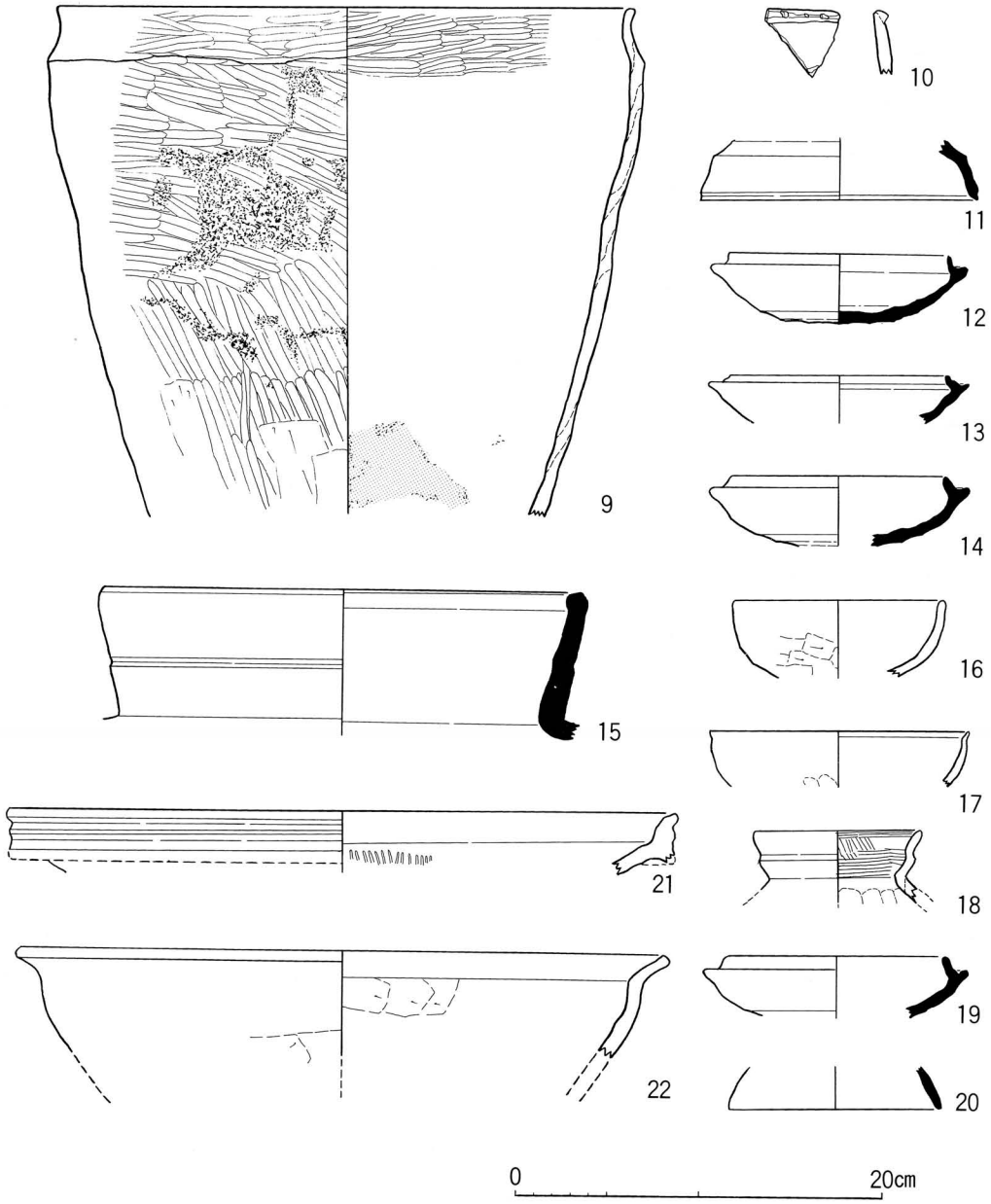
土師器、須恵器、砂岩製のたたき石が出土している。

暗渠３（挿図７－１９）

土師器と須恵器が出土している。須恵器には古墳時代の杯身(１９)がある。

暗渠４

近世の陶器、磁器、瓦が出土している。



挿図７　第２調査区出土土器

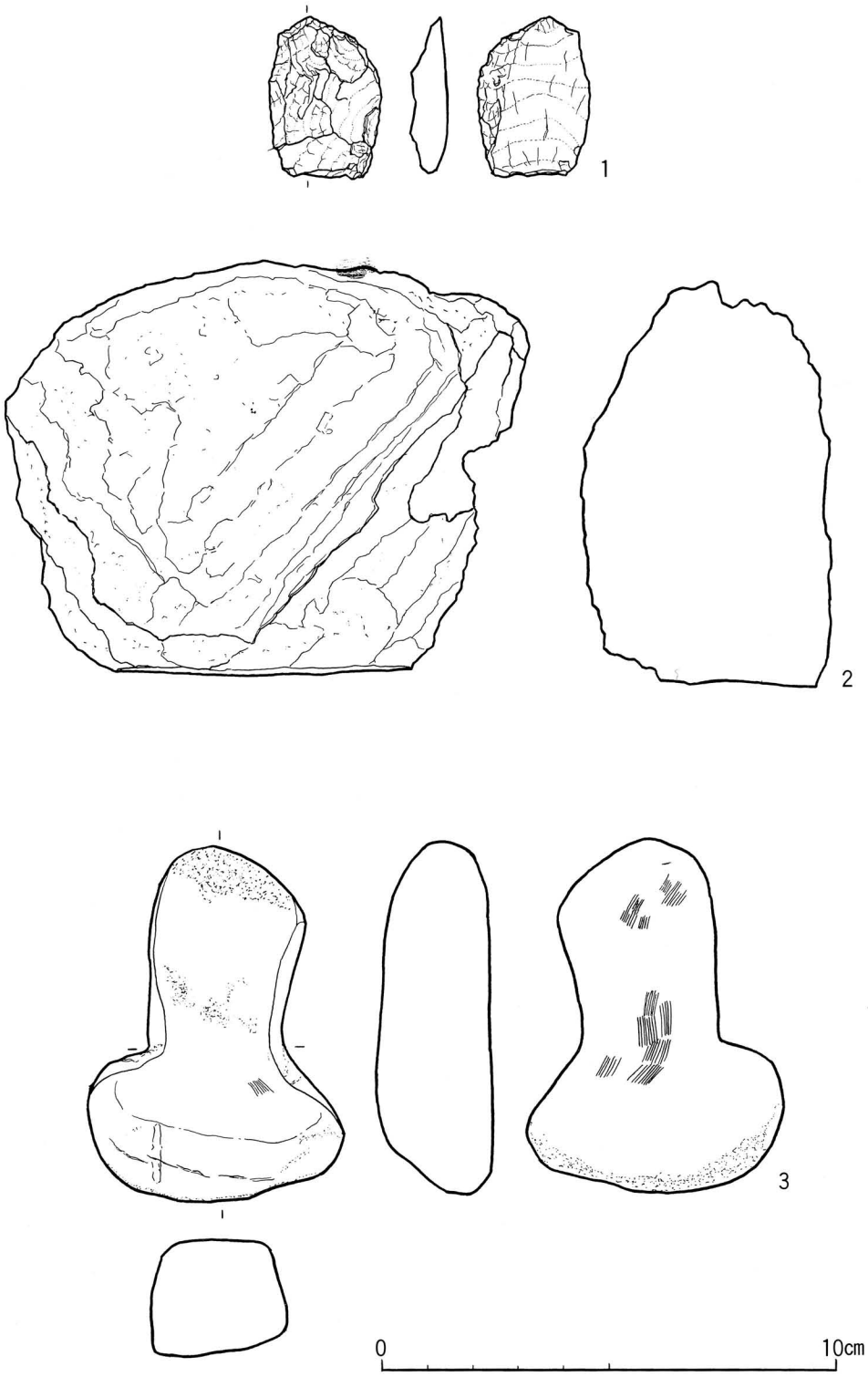
暗渠５

土師器が出土している。細片のため、器種、時期は不明である。

包含層

第９層

奈良時代の土師器の皿が出土している。



挿図８　出土石器

第8層（挿図７－２０）

古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器、奈良時代の製塩土器、中世の瓦器、須恵質土器が出土している。

須恵器には古墳時代の蓋（２０）、奈良時代の杯と甕がある。

第7層（挿図７－２１）

土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦、サヌカイトの剥片が出土している。

陶器には丹波焼とおもわれるすり鉢（２１）が１点ある。

第5層

陶器、磁器が出土している。

これらの他に撹乱土・側溝から土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器が出土している。

（粟田　薫）

Ⅳ　ま　と　め

錦織南遺跡では1981年に初めて遺跡の南部において大阪府教育委員会によって本格的な発掘調査が行われ、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式及び大洞C_1式土器を含む自然河道が検出された。その後、富田林市及び大阪府教育委員会による発掘調査の機会が増え、弥生時代から中世に至る遺構が検出され、しだいに遺跡の内容が判明してきている。

今回の発掘調査は大和川下流流域錦郡中継ポンプ場築造に伴って実施した。第１調査区は低位段丘上にあって、上述した府教委検出の縄文晩期河道の北側延長を確認できる好位置にあった。検出した遺構の内、溝１がその延長の可能性が高いと判断され、西接の下水道幹線立坑に係る府教委の調査では遺構が検出されていないことから、この溝は約６ｍの幅員をもち断面が緩やかなＶ字を呈し、また、旧国道内配電管埋設による府教委の調査では調査区から７～12m地点で流路が確認されていることから道路に沿って北延することが予想される。このことから、従来想定されていた低位段丘上における同時期の集落の存在が有力視できる。

第２調査区は低位段丘下に位置している。段丘崖に沿って縄文時代晩期の河道１が流れ、その後ほぼ流れを同じくし、中世には機能を失った河道２を検出した。この成果は府教委や平成３年度の調査と同様である。縄文土器には滋賀里Ⅱ・Ⅲ式及び長原式のものがあり、関連調査を総合すると縄文時代後期から晩期の新しい段階までの資料が出土している。

（中辻　亘）

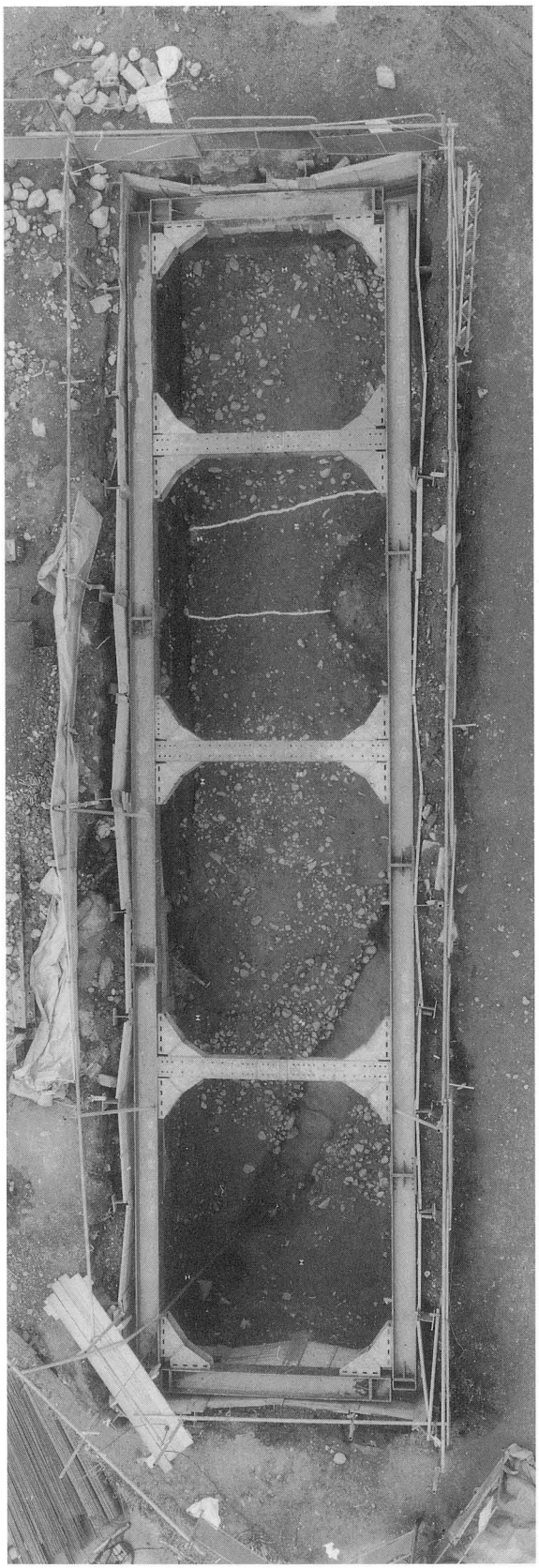
番号	器種	遺構・層位	法量 口径	(cm) 器高	底径	鍔部径	技法	紋様	色調	胎土	備考
1	甕	Ⅰ区 溝1	22.5	3.7	—	—	口縁部内外面：よこなで 体部内面：刷毛目（斜方向）	—	淡橙色	やや粗	土師器
2	甕	Ⅰ区 溝1	32.5	14.7	—	—	口縁部内面：刷毛目、外面：なで 体部内面：なで・指頭圧痕、 外面：刷毛目（斜方向）	—	橙色	精良	土師器
3	把手	Ⅰ区 溝1	—	—	—	—	体部内面：なで、 外面：刷毛目（斜方向） 把手部：なで、指頭圧痕		橙色	精良	土師器
4	杯身	Ⅰ区 溝1	—	3.2	—	—	内外面：回転なで		灰青色	良	須恵器（陶邑Ⅱ型式）
5	椀	Ⅰ区 第3層	12.7	4.1	—	—	内外面：回転なで	—	緑灰色	—	青磁
6	羽釜	Ⅰ区 第3層	25.4	6.9	—	32.1	口縁部内面：刷毛目（斜方向）、 外面：よこなで 体部外面：へら削り	—	灰白色	やや粗	瓦質土器
7	直口壺	Ⅰ区 攪乱	9.6	4.2	—	—	内外面：回転なで	頸部：沈線2条	黄灰色	精良	須恵器（陶邑Ⅱ型式）
8	杯身	Ⅰ区 攪乱	—	4.2	—	—	内外面：回転なで 高台：貼り付け	—	灰白色	精良	須恵器（陶邑Ⅳ型式）
9	深鉢	Ⅱ区 河道1	31.5	27.9	—	—	口縁部内外面：条痕（横方向）、 体部内面：なで 外面：巻き貝による条痕（上半・横方向、下半・縦方向）、底部外面：へら削り	—	黒褐色	粗	縄文土器（滋賀里Ⅱ式） 体部内外面に炭化物付着 （外面は上位2／3、内面は下位1／4）
10	深鉢	Ⅱ区 河道2（下層）	—	—	—	—	外面：なで	口縁部：刻み目凸帯1条	黒褐色	粗	縄文土器（長原式）
11	杯蓋	Ⅱ区 河道2（下層）	15.1	3.4	—	—	内面・口縁部外面：回転なで 天井部外面：回転へら削り	—	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式） ロクロ：右回り
12	杯身	Ⅱ区 河道2（下層）	12.0	3.8	—	—	口縁部内外面：回転なで 底部内面:回転なでの後、一定方向のなで、外面回転：へら削り	—	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式） 外面：自然釉付着、他の土器片付着
13	杯身	Ⅱ区 河道2（下層）	11.8	2.6	—	—	内外面：回転なで	—	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式）
14	杯身	Ⅱ区 河道2（上層）	11.6	3.8	—	—	内面、口縁部外面：回転なで 底部外面：回転へら削り	—	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式） ロクロ：右回り
15	直口壺	Ⅱ区 河道2（上層）	26.3	8.1	—	—	内外面：回転なで	頸部：沈線1条	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式）
16	杯	Ⅱ区 河道2（上層）	11.3	4.2	—	—	内面・口縁部外面：よこなで 底部外面：へら削り	—	淡褐色	粗	土師器
17	杯	Ⅱ区 河道2（上層）	14.1	3.0	—	—	内外面：よこなで	—	淡褐色	良	土師器
18	壺	Ⅱ区 河道2（上層）	8.9	4.0	—	—	口縁部内面：刷毛目、体部内面：指頭圧痕、外面：よこなで	—	乳黄橙色	良	土師器
19	杯身	Ⅱ区 暗渠3	11.9	3.4	—	—	内面・口縁部外面：回転なで 底部外面：回転へら削り	—	灰色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式） ロクロ：右回り
20	杯蓋	Ⅱ区 第8層	11.6	2.3	—	—	内外面：回転なで	—	灰青色	密	須恵器（陶邑Ⅱ型式）
21	すり鉢	Ⅱ区 第7層	36.6	3.4	—	—	内外面：回転なで すり目：7本／2.1cm（原体）	—	明褐色	粗	丹波焼（？）
22	鉢	Ⅱ区 攪乱	35.3	5.8	—	—	口縁部内外面：よこなで、 体部内面：へら削りの上からなで 体部外面：なで（上半）、 横方向のへら削り（下半）	—	赤褐色	粗	土師器

表1　土器観察表

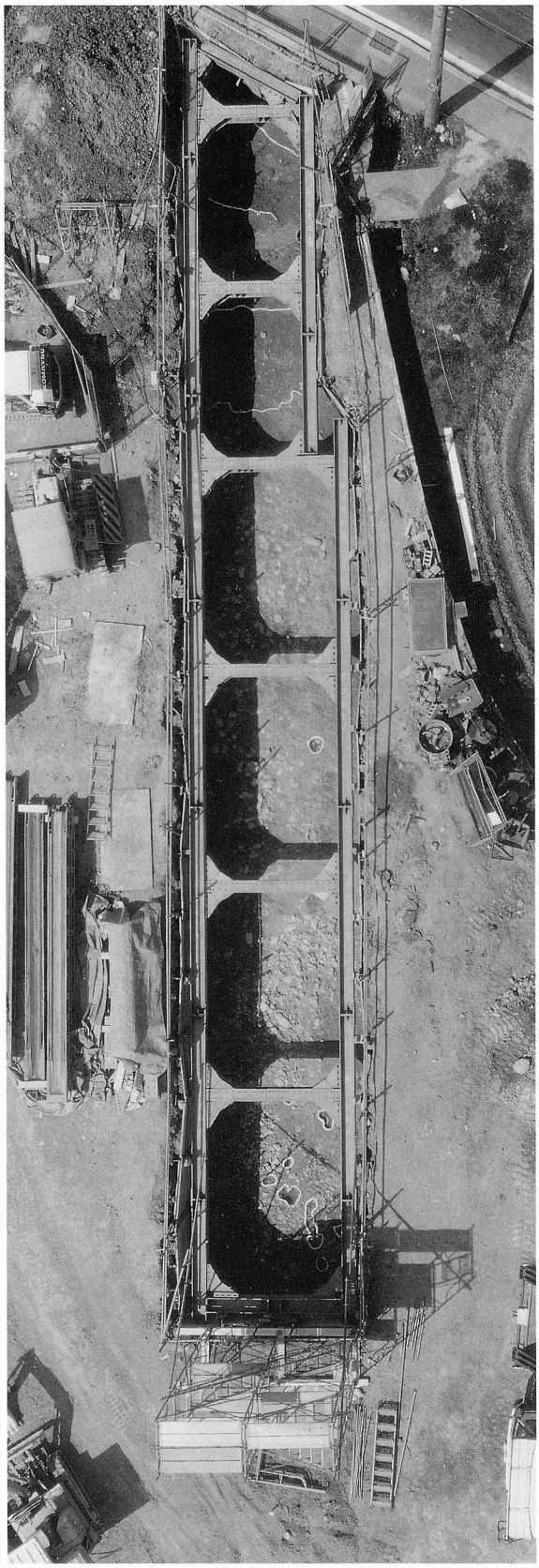
図版１

第１調査区航空写真（南西から）

第２調査区航空写真（東から）

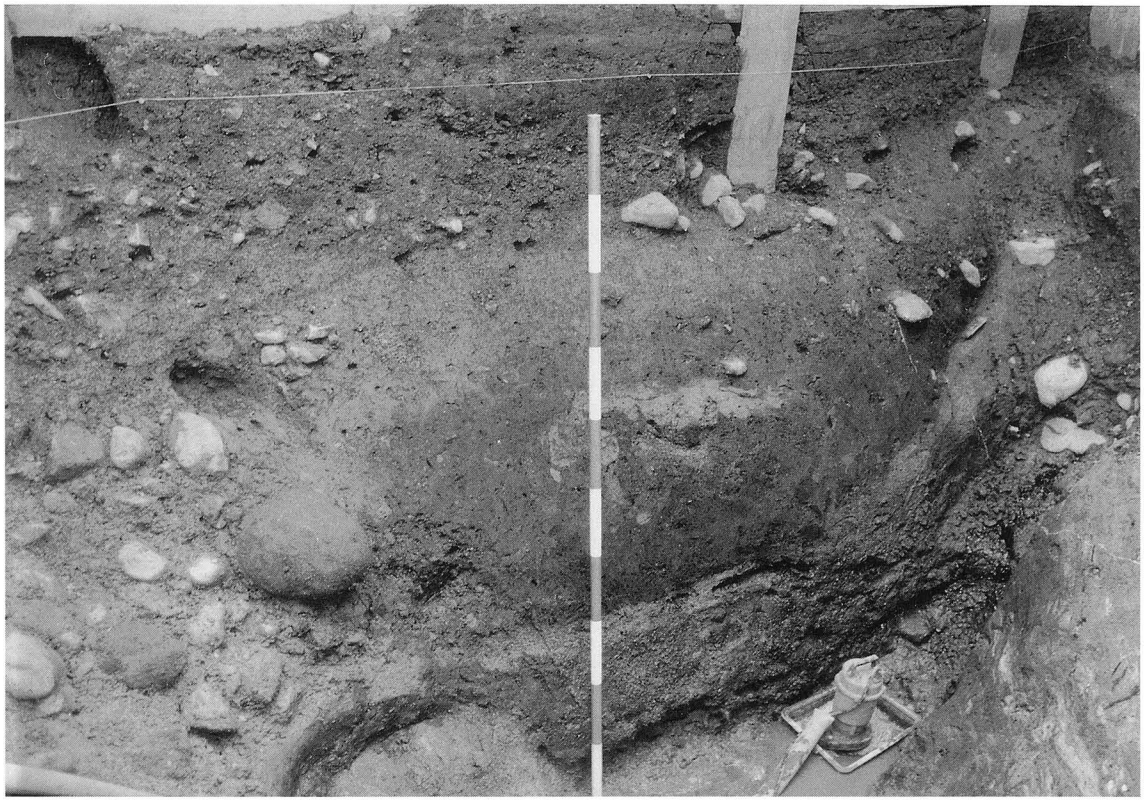


第 1 調査区全景東半部



第 1 調査区全景西半部

図版 3



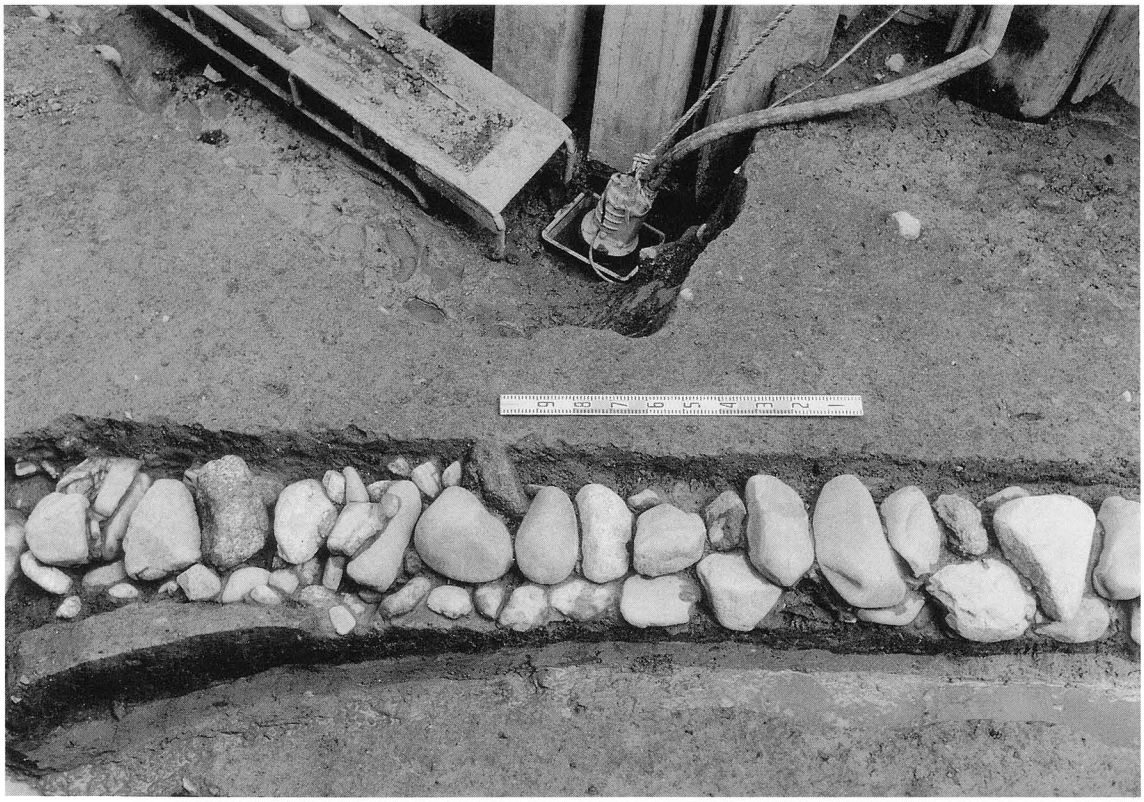
溝１・２南壁断面（北東から）

溝２近景（東から）

溝 3 近景（東から）

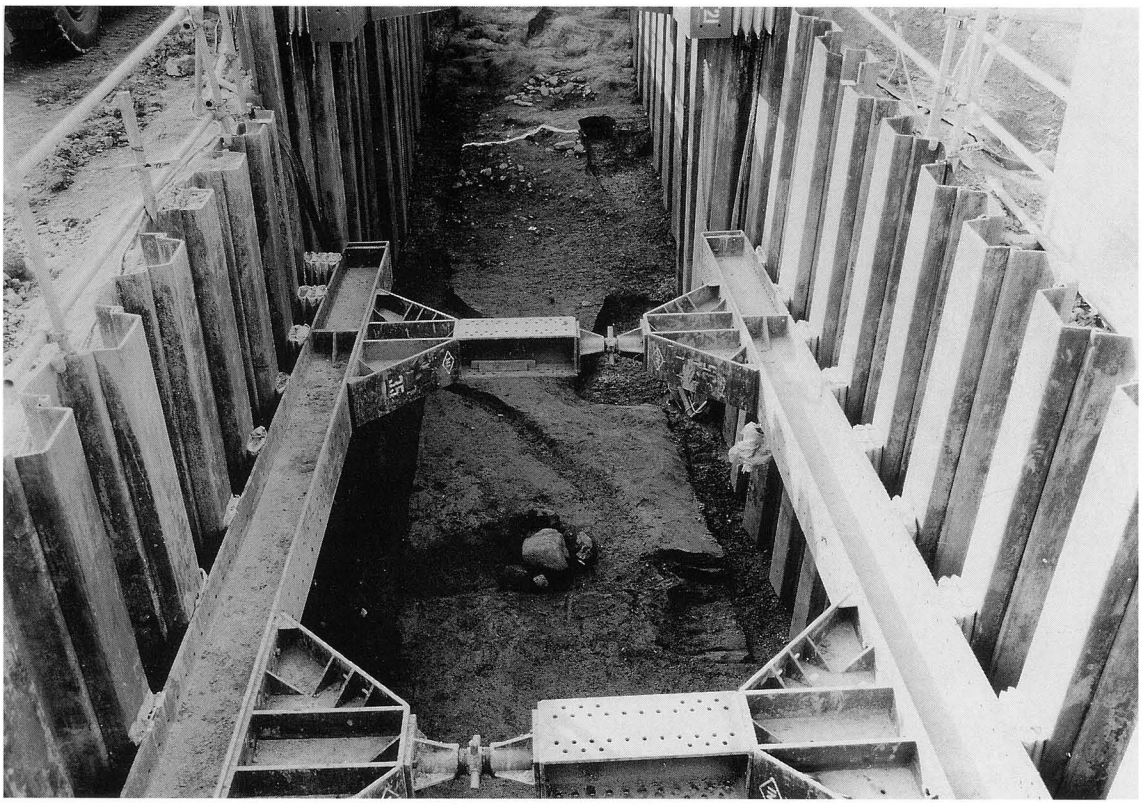
第 1 調査区東端部整地層（東から）

図版 5



暗渠 1 近景（北から）

暗渠 3 近景（北から）



河道 2 西半部近景（東から）

河道 2 東半部近景（東から）

図版７

河道１西半部近景（東から）

河道１東半部近景（東から）

河道 1 内縄文土器出土状況（西から）

第 2 調査区東端部南壁断面（北から）

【錦織南遺跡調査会組織図】

理事長	西尾典次	(富田林市教育委員会教育長　平成4年度)
	清水冨夫	(富田林市教育委員会教育長　平成5年度)
事務局長	花岡主祐	(富田林市教育委員会教育部長　平成4年度)
	東日出男	(富田林市教育委員会教育部長　平成5年度)
事務局次長	山口幹男	(富田林市教育委員会社会教育課長　平成4年度)
	奥野和彦	(富田林市教育委員会社会教育課長　平成5年度)
総務部長	花岡潤一	(富田林市教育委員会社会教育課長補佐)
調査部長	京谷　守	(富田林市教育委員会社会教育課主幹兼係長　平成4年度)
	斉藤義秋	(富田林市教育委員会社会教育課参事　平成5年度)
技師	中辻　亘	(富田林市教育委員会社会教育課主査)
	今西　淳	(富田林市教育委員会社会教育課臨時雇員)
理事	北野耕平	(神戸商船大学教授)
理事	亀岡勝敏	(大阪府教育委員会文化財保護課長)
理事	北野喜久男	(富田林市教育委員会管理部長)
理事	花岡義弘	(富田林市市長公室長)
理事	松浦隆次	(富田林市総務部長)
理事	坂本龍男	(富田林市下水道部長　平成4年度)
	竹下　実	(富田林市下水道部長　平成5年度)

【参考文献】

山本　彰「錦織南遺跡―縄文時代晩期河道の調査―」大阪府教育委員会　1981年

小林義孝「錦織南遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会　1986年

宮野淳一・大楽康宏「錦織南遺跡」(『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要・Ⅵ』大阪府教育委員会　1992年)

中辻　亘・田川友美・粟田　薫「錦織南遺跡」錦織南遺跡調査会　1993年

錦織南遺跡Ⅱ

編集・発行　錦織南遺跡調査会

発行年月日　1994年3月31日

印　　刷　橋本印刷株式会社